



巻頭言：第14期理事長就任にあたって

このたび、日本台湾学会第14期理事長に就任いたしました。本学会が、学際的な地域研究としての台湾研究を志す研究者のプラットフォームとして、また海外の台湾研究コミュニティとの交流窓口として歩んできた四半世紀の道のりを思うとき、お引き受けした責任の重さに緊張を覚えます。幸い、本学会の活動は、学術大会、学会報、ニュースレターの「三点セット」に加え、定例研究会、ウェブサイト等を柱として、安定した軌道に乗り、毎年の活動のリズムを刻みつつけています。また本学会には、専門や世代を異にするメンバーがチームを組んで仕事をするという伝統が長く根づいています。14期常任理事会でも、会員の皆さんのご協力をいただきながら、学会活動の活性化にチームで取り組んでいきたいと思ひます。



川上桃子 会長

本学会が産声をあげた約30年前、日本の台湾研究者たちを悩ませたのは、日本社会における台湾への無関心、台湾を独立した研究対象とする学術活動への無理解、そして台湾に対する植民地支配責任をめぐる研究者としての葛藤であったと思ひます。それから約30年を経て、日本では今、流動化し緊迫する東アジアの国際情勢のもと、台湾への関心がかつてなく高まっています。同時に、台湾をめぐる議論が時に極論に走ったり、過度に感情的になったりする状況もしばしば目にします。台湾でも政治的対立の深まりへの懸念を耳にすることが増えました。

こうした状況だからこそ、台湾をめぐる学術研究のプラットフォームとしての本学会の役割は重要です。心理的安心感がもてる環境があつてこそ、建設的な相互批判を通じて、多様な知識を生み出し、台湾に対する理解を広げ、深めていくことが可能になります。5月の関西学院大学大会は、本学会がつくりあげてきた議論の「場」の力を再確認する機会でもありました。対面での濃密な研究交流と、オンラインが可能にする学術大会への参加障壁の引き下げの「いいどころ」が可能になったのは、ひとえに大東和重委員長をはじめとする大会実行委員会の皆さんの入念な準備と温かいホスピタリティのおかげです。関係者の皆さまに深く御礼申し上げます。

第14期常任理事会では、先輩方が守ってこられた台湾学会のアカデミックな伝統を大切に継承していくと同時に、学会活動の実務面で改善、改革を積極的に進めていきます。まず、デジタル化の取り組みとして、役員選挙への電子投票の導入、学会報のJstage搭載、電子デバイスでの閲覧にあわせたニュースレターのデザイン改定（本号は担当幹事の発案によるこのリニューアルのお披露目号になります）に着手しています。

あわせて14期では、会員による各種学会業務のありかたについても再検討する予定です。本学会に限らず、日本の学会では、学会の各種業務が会員のボランティアで行われてきました。しかし、学会が発展すれば、各種の業務はおのずと増加します。こうした業務をどのように分担していくのか。多忙なかで学会活動の縁の下での力持ちを引き受けてくださる中堅・若手会員の貢献にどう報いていくか。これまでの学会の慣習にとらわれず、議論すべき時期を迎えていると考えます。

本学会はこれまで、パートナー会員制度、大会時の託児サービス、クレジットカードによる会費支払い等の導入を、他学会に先駆けていち早く行ってきました。進取の気風とフットワークの軽さが本学会の身上です。次の10年、20年を見据えた学会活動の持続性を意識して、学会活動の改革に取り組んでいきたいと思ひます。会員の皆さまにはどうぞよろしくご理解、ご協力のほど、お願い申し上げます。

特集：27回学術大会を振り返って

日本台湾学会第27回学術大会は、2025年5月24日（土）、25日（日）の両日、兵庫県西宮市の関西学院大学（かんせいがくいん、Kwansei Gakuin）西宮上ヶ原キャンパスにて開催された。関西での大会開催は、関西大学（2003年）、天理大学（2005年）、京都大学（2017年）に続く4回目、兵庫県での開催は初である。参加者数は会員130名程度、非会員90名程度、併せて200名を超える盛況だった（オンライン参加を含む）。

24日（土）午後に公開シンポジウム「これを語らずして台湾を語るなかれ——地域からの台湾研究」、続いて学会賞表彰式、会員総会、さらに懇親会を開催した。関西学院会館での懇親会は、コロナ禍での飲食業の不振に物価高騰が追い打ちをかけて参加費が割高となったが、100名近い出席者があった。翌25日（日）午前・午後の分科会は、3教室・9分科会（うち1セッション企画が2、2セッション企画が1）に分かれての開催で、発表者は17名だった。参加登録・参加費支払いは昨年度と同じくPeatixを利用したが、トラブル等は少なく、この方式が浸透してきたと感じる。

雨天の中、遠方の大会まで足を運んでくださった参加者、シンポ・分科会の発表者や司会・コメンテーター、大会実行委員、学生スタッフ、そしてシンポに助成を賜った公益財団法人日本台湾交流協会に心よりお礼申し上げたい。ことに清水麗前実行委員長長の懇切なアドバイスなしには無事開催できなかった。記して感謝したい。参加者の記憶に、「関西学院」の「かんせい」という読み、関学関係者の誰もが誇りにする美しいキャンパスの姿が、大会の思い出とともにとどまれば、と願っている。（大東和重/関西学院大学）



当日の会場の様子（提供：大東和重 会員）

第27回学術シンポジウム

第これを語らずして台湾を語るなかれ——地域からの台湾研究

企画者 大東和重

司会：植野弘子

山崎直也「カワウソとクロクマ——金門島の視点から台湾研究を再考する」

横田祥子「台湾中部の田舎町で「国際結婚」を見つめて考えたこと」

呂美親「地方文学史における台湾語文学の発展とその役割——『台湾府城教会報』から『蕃薯詩刊』まで」

倉本知明「異郷を選び取る——南台湾におけるマージナルな死者との共存を通じて」

西村一之「東海岸の港町から照らし出される台湾社会」

川上桃子「シリコンバレー——ハイテク産業の『両湾』関係史」

田本はる菜「中部山地の集落から考える周縁性と多様性」

公開シンポジウムは5月24日（土）午後に開催された。企画者の大東による説明、司会の植野による挨拶に続き、各登壇者の発表、フロアとの討議を行った。

台湾研究の進展・深化は、同時に研究の領域化・細分化をもたらした。学術大会も同様で、会員が一堂に会するシンポにおいて広く共有されるテーマを設定するのは容易ではない。そんな中、今回は登壇者に、「自らの研究を台湾研究全体の中に位置づけ、各自の視点からいかにして台湾の本質に迫っているかを語っていただく。その際に、台湾の中心から離れた地域から語るという視点を組み込み、台湾の片隅を語ることを意味を問いたい」との依頼を出した。どんなシンポになるかと、恐らく企画者がいちばん胸を躍らせながら当日を迎えた。趣旨に賛同しすばらしい発表をしてくださった登壇者の皆様、意気に感じ司会を務めてくださった台南研究仲間の植野先生、シンポに耳を傾け、台湾研究の醍醐味のありかをとともに問い直してくださった参加者の方々に感謝したい。（大東和重/関西学院大学）

分科会報告

第1分科会（ジェンダー・文学） マイノリティの「性」を歴史の中に置 き直す：ノンフィクションとフィクシ ョンの視点から

座長：鈴木賢

コメンテーター：魚住悦子・三須祐介

報告1：橋本恭子

「老いたるマイノリティ女性の声を聞く
——2つのオーラルヒストリー『阿媽的
女朋友』と『茶室女人心』による文学史
の補完」

報告2：劉靈均

「そこには『同志』がいたのか？——林
孟寰劇作『同棲時間』『ミラクルライフ
歌舞伎町』における「日台友好」と在日
台湾人華僑」

第一報告は、『おばあちゃんのガールフレンド』と『茶室女人心』という2つのオーラルヒストリーを取り上げ、「年齢」のゆえに従来の文学作品の中で不可視化されてきた中年レズビアンと高齢セックスワーカーの人生を掘り起こした。彼女らは、家父長制社会の犠牲者という「弱者」イメージで捉えられがちだが、実際には経済的に自立した女性であり、能動性を十分発揮していたことが分析を通して明らかになった。また、伝統的家族とは異なる、相互ケアによるコミュニティ（共同体）を形成することで、孤独であることから解放され、他者との関係性の中で個としての生き方を追求できるような可能性を示唆した。

第二報告は、台湾の劇作家・林孟寰と日本の演出家・山崎理恵子が主宰する劇団「垂細垂の骨」による演劇『同棲時間』『ミラクルライフ歌舞伎町』について分析。両作はともに、「日台友好」という文脈のもとで制作された「日台連携」の作品であり、日台の性的マイノリティや「在日台湾人」の不可視化された歴史を浮かび上がらせる試みであると。両作品とも、BL風のメロドラマやミュージカルの形式をとりながら、植民地支配、買春、国籍、老いなど、マイノリティの「都合の悪い」問題についても描いており、「日台友好」に基づく文化交流の新しい試みであると指摘した。

（鈴木賢/明治大学）

第2分科会 自由論題—都市計画・環境政策

座長：清水麗

コメンテーター：洪郁如・萩原豪

報告1：三文字昌也

「『想女人心』による文学史の補完」

報告2：寺尾忠能

「権威主義体制下の台湾における環境
政策の生成と転換」

三文字昌也報告は、台南の都市計画における「沙卡里吧（盛り場）」展開とその企図に注目し、『台湾日日新報』等の資料から、公設市場の設置過程にみられた動態的な露店の集積過程と本島人の夜店の広がりについて明らかにした。洪郁如会員のコメントでは、地方利権をめぐる本島人と内地人の関係や多様な台湾在住者を抱える植民地社会における民意とは何かという問題が提起された。質疑応答で報告者は、公設市場と盛り場の管理主体が異なることや、台南の盛り場の事例は内地や他の地域に波及するものでなかった点を説明し、また回想録や日記を資料として「民意」や本島人の視線を探る可能性なども見いだされた。

寺尾忠能報告は、環境衛生から環境保護政策への転換となった1979年の台湾地区環境保護法案と李国鼎ら経済テクノクラートの主導的役割を分析した。萩原豪会員は、多くの研究が1987年以降の環境政策に偏重するなか、台湾の環境史を可視化する重要な研究であると評価した。

コメントや質疑への応答で、寺尾会員は、対米断交という危機にあたり短期間で作られた79年の工程表は、李国鼎らテクノクラートの理想主義と政治力の限界から、政策の実行や制度化に長い時間を要した。枠組みとしてその後に継承されなかった面があり、小組が多領域にまたがる部署の調整役としては機能しなかったことを指摘。また、李国鼎や費驊らをテクノクラートの動きとみるか個人の動きとみるかについては、さらに検討が必要な部分があるほか、1983年に台南の夜店が環境政策を理由として移転を迫られた事例も、79年の法案の実行性として検討できるのではないかなど、新たな課題も提起された。（清水麗/麗澤大学）

第3分科会（自由論題—文学）

座長：富田哲
コメンテーター：和泉司・菅原慶乃

報告1 沼崎一郎「ポスト／インペリアルな眼に映る台湾と日本—司馬遼太郎『台湾紀行』と乃南アサ『美麗島紀行』を比較して」

報告2 吳穎濤
「侯孝賢の『珈琲時光』とその受容」

これらの作品は日本の台湾研究者にはよく知られたものであろうが、そのテキストや作品に対する評価をめぐっての実証的な分析は、参加者の興味を喚起するのに十分で、予定時間をこえて活発に議論がおこなわれた。

『台湾紀行』と『美麗島紀行』（+『美麗島プリズム紀行』）では、刊行時期に20年以上の差がある。著者の世代もずいぶんちがうが、沼崎氏は紀行文学たる両者の植民地支配に対する批判の欠如を指摘し、和泉氏は時を経て読者に心地よい「物語」が繰り返されることの意味を問うた。討論では、読者の反応を把握するための方法、二作を並列することの是非やポストインペリアル批評の有効性、作家に情報を提供したり旅をアレンジしたりする側の意図などが話題となった。

吳氏は『珈琲時光』のトランスナショナリティを、小津安二郎へのオマージュ、物語の構造や展開、日台での受容のされ方やマーケティング戦略のずれといった観点から論じたが、菅原氏は、各論ごとにさらに考察を深められるのではないかと述べた。また、「映画製作の方法としてのアジア」といった概念設定の可能性、『珈琲時光』が日本らしさを感じさせる作品と評された理由、台湾映画一般に日本を「女性化」する傾向があることなどをめぐって意見がかわされた。

（富田哲/淡江大学）

謝報告については、コメンテーターより、①作品名「ポラリスの降り注ぐ夜」と北斗七星との表象的関係性、②李琴峰のトランスジェンダー宣言前後の心的葛藤と同作の「あとがき」を一連のものと捉える必要性、③また「関係的位相」を重視する「罔両」たちの「完璧なアイデンティティ」幻想を打破するために援用された「集団カミングアウト」（堀江有里）の戦略も、つまりは同じ集団志向ではないかといった質疑がなされた。またフロアからは、李のカミングアウト以前の研究における倫理的課題に関する指摘があった。

発表者からは、作者の「内離」感情は、共同体内部で区別されることによる疎外感からくるもので、堀江の戦略とは張小虹の述べる、LGBTQ+による「分而不離」（分類されても互いに離れず）の実践に他ならないとの応答があった。

岸川報告に対しては、コメンテーターから、①冷戦期研究など国際的視野を有する研究と接続し得る本報告の可能性について、②また張系国自身の省籍の背景を明らかにする必要性などが指摘された。

フロアからは、バナナボートの文化的イメージと関連させて、本作の「香蕉船」の形象を例えば楽曲「Day-O」に描かれた中南米の情景と地続きのものとして、あるいは政治的亡命や移民の定着の問題としても考察できるのではないかといった多様な見解が提出された。発表者からも、「バナナ表象研究」という視角から、本研究が欧米圏とアジアを繋ぐ内容へ発展してゆく可能性や、張系国の保釣運動期の発言を精査することで外省人の立場から見た国際社会の実像がよりクリアになることについて肯定的見解が示された。（豊田周子/名城大学）

第4分科会（自由論題—文学）

座長：豊田周子
コメンテーター：張文菁・王惠珍

報告1 謝惠貞
「在日台湾人作家李琴峰『ポラリスが降り注ぐ夜』研究——コミュニティの視点から見たLGBTQ+における「内離」感情」

報告2 岸川あゆみ
「張系国『香蕉船』におけるバナナボート表象——環太平洋的視野に見る冷戦期台湾」

第5分科会（歴史学・政治学）

台湾出兵再考－近代東アジア世界の形成と台湾

セッション1：「台湾出兵の政策決定・派兵プロセスの検証」

座長：春山明哲

コメンテーター：春山明哲

報告1 松永正義

「台湾出兵の目的－日本の台湾認識・植民地認識の視点から」

報告2 後藤新

「台湾出兵の決定過程－琉球民遭難殺害事件から出兵の決定まで」

まず、座長から第5・第8分科会の趣旨について、研究の経過、台湾出兵の経過、四つの報告の概要について説明があり、台湾出兵が近代における日本と台湾の関係の起点になったこと、近年の文書史料等の状況により研究の深化が可能になったこと、東アジア世界の形成という広い視野からの総合的検討が必要なこと、という問題提起があった。

松永報告では、台湾出兵を思想史の中に位置付ける前提として基礎的事実の再検討が必要だとし、**「植民地化」**という視点から、薩摩の島津斉彬の構想、清朝期の海難状況の変容、樺山資紀らによる台湾探検調査などが、大久保利通・大隈重信の**「蕃地処分要略」**へいたる過程を明らかにした。さらに、台湾における西郷従道の軍事行動を4期に分けて、兵員等の人数、拠点構築の状況、病死者の増加、清朝側の出兵などを具体的に分析した。台湾出兵を思想史の中に位置づけるには、黒田謙一の**「国防的開業論」**の類型が参考になると指摘した。

春山からは、西郷軍の台湾における行動と清朝の対応を具体的に把握したことを評価した上で、今後思想史的な検討へと進めるための具体的な方法論について質問があった。報告者からは、台湾における研究の進展もあり、台湾所在の史料の活用も必要であること、思想の問題としては、東アジアの歴史的空間の中で**「台湾」**という認識の枠組みが生れてきたことが重要であるとの指摘があった。

次に、後藤報告では、明治維新史研究における征韓論と台湾出兵の関係についての戦前戦後の先行研究を踏まえ、台湾出兵の決定過程における副島種臣と大久保利通の役割についての再検討を試みた。琉球民遭難殺害事件を契機としての副島の**「亜細亜計略論」**と清国における外交過程での**「化外」**発言、征韓論争の帰趨と鹿児島**の不平士族の動向**、福島九成等の台湾調査と熊本鎮台の暴動などを総合的に検討し、大久保の台湾出兵決定における主導性を立証している。後藤によれば、台湾の獲得を目論んだ副島と異なり、大久保は国内的要因から出兵を決定したが、**「台湾先住民地域の獲得」**についての**大久保の考え方**については今後の検討課題とした。コメンテーターからは、大久保の目的は、鹿児島**の不平士族対策**を主眼とした、閣議決定の枠内での**「限定的な兵力使用」**にあった、と考えてよいのではないかと、との指摘があった。

（春山明哲/早稲田大学）

第6分科会 (文化人類学・考古学)

座長：唐顥芸
コメンテーター：上水流久彦・
角南聡一郎

報告1 角南聡一郎
「台湾における考古学・物質文化研究の形成と発展」

報告2 生勝美
「新発見、千々岩助太郎のフィールド動画」

角南聡一郎会員による報告では、台湾における考古学と物質文化研究のあゆみについて、学説史の概略と2000年以降の動向から、その発展と日本との関係について検討をおこなった。コメンテーターからの質問には、台湾の考古学研究が、近年日本の東南アジア考古学研究者に注目されていることの原因はどのようなものかというものがあつた。この要因について、ベトナム青銅器時代のサーフィン文化と、台湾から出土する土器や耳飾との関係が指摘されていることがあるとの回答をおこなった。

中生勝美会員による報告では、千々岩助太郎の16ミリフィルムをyahooオークションで入手し、屏東県のパイワン族の建築調査の様子、大武山の登山風景の動画を紹介した。会場からは、千々岩助太郎や鹿野忠雄など、登山から原住民研究に入った人たちは、原住民の統治政策と関連があつたのか、という質問があつた。それに対しては、当時知識人のスポーツとして定着した登山は、理蕃課の登山許可と同時に、登山の道案内人として、その地域を獵地としている原住民を手配する必要があり、そこから登山と原住民研究が結びつき、原住民統治とは無関係であつたと返答した。また入手した16ミリフィルムは、今度どう活用するか、という質問には、台湾のしかるべき映像アーカイブに寄贈したいが、しかるべき組織を検討中であると回答した。

(唐顥芸/同志社大学)

第7分科会 (自由論題一文学)

座長：豊田周子
コメンテーター：垂水千恵

報告
西端彩
「黄春明が描くその時代と歴史の記憶——「日本」表象に着目して」

西端報告に対しては、コメンテーターから、黄春明は戦後70年代に邦訳『さよなら・再見』が出版された著名な作家でありながら、日本では取り上げられることが少ないという研究上の問題点が示されるとともに、そのような状況下にあつて、本報告が果敢に黄作品に取り組み、とくに60年代から70年代半ばに書かれた「日本」表象とその「記憶」を描く作品に着目した点が評価された。その一方で、①作品分析時に具体例を挙げながら丹念に論じる必要性や、②黄作品の「抗日」の記憶は、「中国化」「脱日本化」を掲げる政府による党国教育の影響だけで、呉濁流作品などからの影響は考えられないのか、③これらの日本表象は「台湾意識」につながるのか、④80年代以降の作品にも同種の傾向はみられるのかといった質問がなされた。フロアからは、作品が書かれた当時、台湾の若手エリート層の多くが欧米志向だったなかで、日本時代を描いた黄の特異性について指摘があつた。

発表者からは、現時点では黄作品における他からの思想的影響関係を明確に把握できておらず、80年代以降の作品の検討と併せてさらなる分析に努めたいとの応答がなされた。

(豊田周子/名城大学)

第8分科会（歴史学・政治学）

台湾出兵再考－近代東アジア世界の形成と台湾 セッション2：「台湾出兵と国際社会」

座長：春山明哲

コメンテーター：野嶋剛

報告1：望月直人「至大久保所説公法」－「台湾出兵事件」交渉における「万国公法」の分析

報告2 羽根次郎「1873年副島渡清における中国対日外交とテクノロジー」

望月報告は、「台湾出兵事件」交渉における清朝の国際法に対する姿勢について、清朝中央の外政機関である総理衙門が、欧米において蓄積のある国際法について高度な論戦はまだまだ困難であった現実を意識し、国際法の清朝への適用を回避しつつ他国を論破・拘束する根拠としてのみ活用しようとする意図から、国際法の利用について慎重であったと指摘する。他方、大久保利通は清朝に対しては国際法を前面に出し、随行したフランス人法学者ボワソナードの検討をもとに、『公法彙抄』という漢文の覚書を清朝側に送ったことを論じた。

羽根報告では、副島種臣外務卿の渡清に遡り、台湾・中国の最新の史料を利用することにより、1870年代の「運輸通信革命」の渦中における、台湾出兵をめぐるジャーナリズムの「港際情報体制」下の動態を描く。具体的には、横浜・上海・香港の三開港場の英字紙「ジャパン・メール」等による報道の情報速度と、それに遅れを取った副島の軍艦による移動を取上げ、この情報ギャップを利用した李鴻章の上海人脈を析出する。関連する史料を豊富に用意して、実証を進める報告者の手法は、非常に興味深いものであった。

コメンテーターの野嶋は詳細な資料を用意して、「西洋の衝撃」下の台湾出兵について、望月報告は「国際法・万国公法」という「政治の衝撃」を、羽根報告は「通信・運輸」という「経済の衝撃」を検討したと説明する。

望月報告に対して、野嶋は「万国公法」に対する向き合い方は「半身の中国」と「正対の日本」という対照的なものがあったが、それは何故なのか、と問う。望月は、中国が自身を文明（＝「中華」）とする立場・姿勢から、「万国公法」の価値・有用性の有無を主体的に吟味し判断したのに対し、日本は「万国公法」を文明の象徴と考え、それを利用することで自己の文明性をアピールした、と回答した。

また、野嶋は羽根報告に対して、蒸気船と海底ケーブルがもたらした第一次グローバリゼーションが、台湾出兵の政治とメディアに与えた影響はなにか、という視点からコメントを試みた。羽根からは、周縁（台湾）での問題が中心（北京）を志向する場合には、「情報速度」の鈍化が清朝に有利に働いた一方、周縁に留まる場合には、逆に対応の遅れを招くこととなり、台湾出兵とは後者が顕著に現われた問題ともいえるとの回答があった。

なおフロアからはやや専門的なコメントのほかに、当事者である原住民族自身が近年自分たちの歴史について発言を始めており、そうした動きには十分留意すべきだとの重要な指摘があった。そうしたことをふくめて、台湾と日本の間でも共同研究の気運が盛り上がることを期待したい。

（春山明哲/早稲田大学）

第9分科会（人類学）

「義愛公開基百年祈安巡禮大典」共同調査報告

座長：三尾裕子

コメンテーター：五十嵐真子・陳宣聿

報告1 遠藤協「『台湾の神』になった日本人 民族誌映像で見る義愛公信仰」

報告2：三尾裕子・藤野陽平・林定緯

「100年を迎えた義愛公信仰 信仰、儀礼、ネットワーク」

本分科会は義愛公信仰100周年を祝う「義愛公開基百年祈安巡禮大典」についての共同調査の報告である。台湾の民間信仰研究において日本神を位置付け、その研究史上の意義を確認した。続いて報告1と報告2を通じて義愛公信仰の特徴、本祭典の内容、日本神の中で最多の分霊先と本拠地との関係について論じた。

五十嵐からは義愛公が地域に根ざした信仰になっている点と、産業の転換が起こした人口移動に言及している点で意義深いとコメントがされ、シンクレティズムとして捉えられるのか、台湾研究としてどのように位置付けられるのかという質問が寄せられた。陳からは注目を集める日本神の中でも珍しい祭典の事例を報告し、儀礼を通じて参加者も義愛公の神話を身体化していくことを報告した点で意義深いというコメントが寄せられ、義愛公と修行した地藏王や神に推挙した媽祖など神々との関係について質問が寄せられた。

それらに対し、義愛公のように国籍を越えた神には普遍的な価値観を求める傾向があること、歴史を語る能力のある知識人ではなく民衆にとっての日本統治期の歴史を提示することで台湾研究に貢献できると言ったりプライがなされた。

（藤野陽平/慶應義塾大学）

第2回日本台湾学会学術賞（歴史社会分野）

推薦図書 垂水千恵『台湾文学というポリフォニー—往環する日台の想像力』（岩波書店、2023年）



この度、2023年3月に上梓した拙著『台湾文学というポリフォニー—往環する日台の想像力』が第2回日本台湾学会学術賞を受賞したことは望外の喜びである。まずはこの場をお借りして、審査委員および推薦者の先生方、また書評や読書会でお取り上げくださった方々をはじめとする、すべての読者のみなさまにお礼を申し上げたい。

「あとがき」でも触れているが、同書は私にとって『台湾の日本語文学——日本統治時代の作家たち』（1995）、『呂赫若研究——一九四三年までの分析を中心として』（2002）に続く3冊目の日本語単著に当たる。

その間、共編著や翻訳書はあったとは言え、長い道のりであった。費やした時間の長さが質の高さに繋がっているとは思わないが、「推薦理由」において「各章で展開される作家論や作品論自体が、台湾文学の多元的な解釈を示すだけでなく、その個別論が更に相互に関連して台湾文学の総体的多元性を示す」という評価を受けたことは素直に嬉しい。

また、ある書評において、拙著の通読を通して「『台湾文学』とその研究が多様化していった様子ははっきりと見えてくる」というコメントをいただいたことも、20年を超える歩みの鈍さに免罪符をいただいたようで嬉しかった。私の唯一の誇りは、1998年の日本台湾学会設立大会から、海外滞在等による2回の欠席を除いて学術大会には毎年参加していることであり、今回の受賞もいわば「学会参加ほぼ皆勤賞」としてありがたく頂戴したい。そして、2023年の刊行時には「振ってももう何も出てこない」空っぽ状態であったが、今、少しずつ「満ちて来るもの」を感じつつあることを近況として報告しておきたい。これまで支えてくださったみなさま、ありがとうございました。

第13回日本台湾学会賞（歴史社会分野）

<受賞論文> 鈴木恵可・マグダレナ・コウオジェイ「トランスナショナルな視点からみた台湾と日本の近現代美術史——日台夫妻の油絵画家・吳天華と小嶋久子の画業と人生を事例に——」『日本台湾学会報』（第26号）

この度は本賞に選出頂き、誠にありがとうございます。研究をサポートしてくださったご遺族や美術史研究の仲間をはじめ、査読者・選考委員会の皆様へお礼を申し上げます。

近年の美術史研究では、「越境する人と作品」への注目が集まっている。しかし、そのようなトランスナショナルな研究は、複数の言語・地域への深い知識、そして複数地域での調査が要求されるため、実現へのハードルが高い。本論文へとつながる研究プロジェクトは、コロナによるパンデミックの影響もあり、筆者二人が日台に分かれての共同研究として始まった。二人にとっても初めての試みとなったが、最終的には一人では成し得なかったものができたと感じる。お互いへも感謝の気持ちを伝えたい。

台湾美術史は、1980年代末以降に台湾で研究が始まった。いわゆる台湾意識・台湾ナショナリズムと密接に関連し、一方で台湾におけるナショナリズムのあいまいさをも表していると言える。現在、各国の美術史で、ナショナルアートヒストリーへの反省と、境界を越える視点が生じているなかで、台湾美術史の今後の発展は重要である。つまり、国民国家のために書かれた典型的な「閉じられた美術史」となるのか、それとも美術史の新しい形を示してくれるのか。日本と台湾という複層的な地域・国籍・アイデンティティーのなかで生きた吳天華と小嶋久子という二人の画家の足跡が、そのための挑戦的な試みのひとつとなれば幸いである。

全世界で**1,200**以上の学術機関が利用

台湾聯合百科電子出版会社 オンラインデータベース



台湾に本拠を置く学術出版社である台湾聯合百科電子出版会社 **United Digital Publications Co., Ltd. (UDP)** は、漢学と台湾研究を専門分野とし、優れた学術誌や歴史のある雑誌などをデジタル化してきました。

AI多言語自動翻訳機能も導入し、台湾の研究者の視点だけでなく、世界中の漢学・アジア研究に関心のある学術誌との連携をはかり、新たな知見を生み出すことを目指しています。

UDP 既刊 オンラインデータベース ～ 雑誌、古典、美術分野 ～

Journal Series

Sinica Sinoweb 中研院經典人文學刊
Taiwan Journals Search 臺灣人社百刊
Taiwan Epochal Democracy Magazines 臺灣經典民論雜誌
The Continent Magazine Archive 大陸雜誌
Zhuanji Wenxue Digital Archive 傳記文學全文資料庫
Modern China Database 近代中國雜誌

Classic Series

Biaodian Guji Tushu Jicheng 標點古今圖書集成
Taiwan Wenxian Congkan 臺灣文獻叢刊
Taiwan Wenxian Congkan: Continuation 臺灣文獻叢刊續編

Art Series

National Palace Museum Journals Archive 故宮期刊知識庫
LionArt Digital Archive 雄獅美術知識庫
Chinese Calligraphy and Inscription Collection 歷代書法碑帖集成

*各データベースの価格、収録明細などの詳細はお問合せください。

小社 **Library Navigator** もご覧ください。

https://kw.maruzen.co.jp/ln/ec/ec_udp01.html



台湾聯合百科電子出版会社 / 日本代理店 丸善雄松堂

M MARUZEN-YUSHODO

丸善雄松堂株式会社

学術情報ソリューション事業部 企画開発統括部

e-mail: e-support@maruzen.co.jp

**無料トライアル
受付中！**

(個人・機関ともに1ヶ月間)



著作権：jannoon028 / 出典：Freepik

iRead eBooks 【台湾 E-book コレクション】

Airiti “アリティ”が誇る台湾・中国大陸・香港・マカオ・シンガポール・マレーシア・シンガポールなどの 60,000 タイトル以上の eBook コレクションが利用可能です。一冊ずつの買い切り購入のほか割安となる全分野・カテゴリごとの購読購入もお選びいただけます。ご機関様向けに公費お支払にも対応しています。

2025 年 9 月：インターフェースが一新されました。

全世界向けとして利用者体験の向上を目指すリニューアルです。
感覚的に使えて、かつ速度も速く使いやすいものとなっています。
日本語タイトルも積極的に搭載中。以下のページから収録タイトル
をご確認ください。 <https://www.airitibooks.com/>



台湾と中国の学術リソースをプラットフォーム統合した Airiti “アリティ” から台湾発行（一部マレーシア等アジア・世界各地含む）3,000 タイトルを精選した E-ジャーナル・コレクションです。SCIE、SSCI、A&HCI、EI、MEDLINE などの国際的に重要な検索データベースに含まれる、優れたジャーナルを主に収集しました。 <https://www.airitilibrary.com/>

大学図書館コンソーシアム連合 (JUSTICE) 採択。ほとんどの大学様はコンソーシアム向け大幅割引価格が適用されます。

【NEW】円価格を設定。為替動向に関わらず一定価格となるため購入計画が容易となります。詳細お問い合わせください。

【収録分野・タイトル数】

全 2,984 タイトル（'25 年 5 月時点）

人文学：898 誌 / 社会科学：1,240 誌 /
基礎応用科学：333 誌 / 医薬衛生学：671 誌 /
生物農学：202 誌 / 工学：297 誌

【主な導入機関】

台湾：600 機関以上（大学では市場占有率 100%。大学以外にも高校、病院、政府機関を含む）
中国大陸：300 機関以上（北京大学、清華大学、中国人民大学 等） / トライアル実施 2,500 機関
アメリカ：40 機関以上（ハーバード大学、スタンフォード大学、アメリカ議会図書館 等）
日本：'20 年実施の COVID-19 対応支援：無償アクセスでは 40 もの機関様にご利用いただきました



文生書院

日本販売総代理店 〒113-0033 東京都文京区本郷 6-14-7
電話(03)3811-1683 Fax:(03)3811-0296 E-mail: info@bunsei.co.jp

第175回日本台湾学会定例研究会

台湾情勢セミナー
「頼清徳政権1年目を振り返る」

2025年6月20日（金）13:30～14:45

会場：早稲田大学早稲田キャンパス 3号館809教室

主催：日本台湾学会、早稲田大学台湾研究所

参加人数：35人

司会 平川幸子（早稲田大学客員上級研究員）

講演 石原忠浩（台湾国立政治大学日本研究プログラム修士課程副教授）

石原氏はまず、所属する国立政治大学と日本研究プログラムについて紹介し、自身が編集長を務める日本語学術誌『問題と研究』の意義を説明した。次に台湾の内政について、2024年選挙で頼清徳總統が当選した一方、議会では国民党と民衆党が主導権を握っている現状を報告。頼政権は気候変動や社会福祉などに対応する委員会を設置し、成果重視の姿勢を示すが、議会との対立や「大罷免案」をめぐる政争が深刻化していると指摘した。中台関係では、頼總統は「現状維持」路線を継承しながらも、対中強硬姿勢を維持し、中国は圧力と交流を交えた対応を取っている。外交面では、台湾の国交国減少や米中関係の変動が課題であり、TSMCの対米投資やアメリカへの依存への懸念も指摘された。日台関係については、経済・文化交流が良好に進展しており、日本人顧問の任命や戸籍表記の変更など象徴的な動きが見られるとした。総じて、内政の混迷、兩岸関係のリスク管理、米中関係への柔軟な対応、日台間の民間交流深化が重要になると展望した。質疑応答では、会場から活発な質問が寄せられた。

（松葉隼/早稲田大学）

第176回日本台湾学会定例研究会

「台湾の高校生と民主主義—公民教育最前線—」

2025年7月19日（土）14:00～16:45

会場：早稲田大学早稲田キャンパス 3号館305教室

主催：日本台湾学会、NPO法人日本台湾教育支援研究者ネットワーク（SNET台湾）、早稲田大学台湾研究所、JSPS科研費（24K05612）

参加人数：85人

司会 許仁碩（北海道大学 助教）

趣旨説明 山崎直也（帝京大学 教授）

講演 郭復齊（国立台南第一高級中学 公民科教諭）

コメント 御厩祐司（茨城県立水戸第一高等学校 校長）

コメント 田中駿介（東京大学大学院 院生）

今回の研究会では、「台湾の高校生と民主主義—公民教育最前線—」と題して、台湾における教育と民主主義、若者の政治参加、主権者教育について議論した。まず、戦後台湾の教育を専門とする山崎が本企画の主旨を説明し、公民教育最前線の生の声を聞くための「交通整理」を行った。ゲストスピーカーは、国立台南第一高級中学で「公民と社会」を担当する郭復齊先生であり、郭先生は「台湾の高校生と社会参加」と題して、①「課程綱要」（日本の「学習指導要領」に相当）の改訂への高校生の参加、②教育政策、学校での意思決定への高校生の参加、③小中学校に学生自治を根づかせるための政策的取り組みについて、豊富な事例を示して、最新の動向を紹介した。制服、髪型といった身近な生活上の話題から「課程綱要」の改訂という国家的決定に至るまで、台湾の高校生の関心の高さと行動力、高校生の声を現実に生かすための仕組みのあり方は、多くの参加者に新鮮な驚きをあたえるものであった。郭先生の講演に対し、茨城県立水戸第一高校の御厩祐司校長、東京大学大学院の田中駿介氏がそれぞれ日本の学校現場と政治学の視点からコメントを行い、フロアからも多くの質問が寄せられた。

（山崎直也/帝京大学）

第177回日本台湾学会定例研究会

『台湾総統選挙 増補版』出版記念トークショー

企画の日時：2025年8月5日（火）17:30～20:00

会場：早稲田大学3号館305教室

主催：早稲田大学台湾研究所、日本台湾学会定例研究会（関東）

参加人数：150人

司会 川上桃子（神奈川大学経済学部教授）

報告者 小笠原欣幸（台湾・国立清華大学荣誉講座教授、東京外国語大学名誉教授）

本報告は二部構成となっており、前半では2024年8月以降、台湾の国立清華大学で行われた教育・研究指導の経験談が共有され、後半では今年7月に台湾で実施された罷免投票と今後の政局についての分析が行われた。

清華大学では、報告者の小笠原氏が「台湾選挙研究」や「两岸関係と台湾の選挙」といった科目を開講し、新竹市の地方政治家をゲストスピーカーとして招いた。学生のゼミ発表やレポートのレベルは高く、在学生だけでなく、他大学の学部生や市民の聴講生も積極的に参加していたと述べられた。また、小笠原氏の観察によれば、人文社会系の学生は理工系の学生に比べ、社会問題や政治への関心が比較的高い傾向が見られる一方で、台湾の20歳前後の若者を「ひまわり運動の世代」とみなす従来の認識は、見直しが必要であると指摘された。

今回の罷免投票に関しては、国民党所属の立法委員24名と新竹市長1名が罷免対象となった。一方で、罷免派市民団体の特徴としては、30代の女性が主力を担い、10年前のひまわり運動に参加した、あるいはその影響を受けた人が多かった点が挙げられる。国民党・反罷免派は、「大罷免」という手段そのものへの疑問を投票行動に結びつけることに成功し、他方、民進党・罷免派は、この「大罷免」という手段に対して民意の十分な理解を得られなかったとの結論に至った。罷免投票後の政局については、頼政権の支持率に大きな打撃となり、野党が主導権を握り、中国との距離感が変化する可能性がある」と指摘された。質疑応答ではフロアから多くの質問が寄せられ、活発な議論が交わされた。

（魏逸瑩/早稲田大学）

第178回日本台湾学会定例研究会

全米図書賞（翻訳部門）受賞記念『中外文學』楊双子研究專輯 日本特別企画座談会「台湾文学の旗手 楊双子とその作品」

2025年8月26日（火）15:00～17:30

会場：日本大学文理学部オーバルホール

主催者・共催団体：中外文學・NSTC科研費「從對峙到越界：當代台灣純文學與大眾文學的互動生成」計畫・JSPS科研費(23K00340)、日本台湾学会（定例研究会）・東京台湾文学研究会・
國立中興大學台灣文學與跨域文化研究所・日本大学文理学部中国語中国文化学科

参加人数：105人

司会：陳國偉（國立中興大學文學院副院長）・赤松美和子（日本大学文理学部教授）

講演：楊双子（作家）

藤井省三（名古屋外国語大学教授、東京大学名誉教授）

垂水千恵（横浜国立大学名誉教授）

通訳 張文菁（愛知県立大学准教授）・邱政梵（東京大学総合文化研究科博士後期課程）

去年、全米図書賞（翻訳部門）を受賞した楊双子氏をお招きし、臺灣大學外文系の雑誌『中外文學』楊双子特集に掲載予定の座談会を、日本大学文理学部にて開催した。

第一部では、会員である赤松の趣旨説明に始まり、楊双子氏「なぜ私の歴史エクリチュールのテーマは、百合・空間・飲食なのか」、藤井省三会員「屋台の小姐（お嬢さん）たちと酔仙閣の紳士たち—楊双子『台湾漫遊鉄道のふたり』の中の佐藤春夫「女誠扇綺譚」」、垂水千恵会員「座談会に先立って」、三名が順に講演を行った。

第二部では、陳國偉氏が司会を務め、まず、楊双子氏の修士時代の指導教官として、作家として活躍する前の楊氏の経歴について紹介した。その後、楊氏は、第一部で講演者より提示された質問に応答した。続いて、陳國偉氏が、「楊双子の作品とこれまでの台湾文学作品における「歴史」の書き方や表現の違いについて」「楊双子の作品とこれまでの台湾文学作品は、「ジェンダー」の書き方や表現の違いについて」、藤井会員、垂水会員に質問を投げかけ、両氏の応答に、さらに楊双子氏が答える形で座談が進行し、台湾文学史に楊双子作品を位置づける意義深い座談会となった。なお本イベントは、日本大学文理学部中国語中国文化学会100周年記念行事の一環としても行われた。

（赤松美和子/日本大学）

コレクション 台湾のモダンイズム 第1期 第2回

■監修 和田博文／河野龍也／呉佩珍／富田哲／横路啓子／和田桂子
日台双方の膨大な一次資料から重要文献を厳選。モダンイズム資料の決定版。第2回・全4巻Ⅱ⑤水道と電気(清水美里編)⑥衛生と病院(鈴木哲造編)⑦農業と林業(黄紹恒編)⑧帝国大学・旧制高校・旧制専門学校(和泉司編)
各19,800円

台湾における「日本」の過去と現在

糖業移民村を視座として

■「著」野口英佑 日本統治時代を経験した台湾の人々、そして現代台湾社会において「日本」はどのように位置付けられ、どのような意味を有しているのか。かつて糖業移民村であった龍田村の神社の再建を通して見えてくる、重層的な台湾社会の相貌。
2,970円

記号化される日本

台湾における哈日現象の系譜と現在

■「著」張瑋容 台湾における「日本オタク」を理論的に分析し、インタビューやフィールドワークと理論的分析を重ねながら、その多様な対日感情構造を解説。「哈日現象の最中に中学生になった」社会学者による、台湾における、「日本」の記号学的分析。
8,800円

近代台湾都市案内集成

■監修・解説 栗原純／鍾淑敏……………全20巻●揃363,000円
様々な視点で台湾を紹介した一八九七〜一九四一年の文献を収録。
●第一回配本…「台湾鉄道旅行案内」シリーズ 全6巻●揃90,200円
●第二回配本…「台湾全島の案内記」 全6巻●揃118,800円
●第三回配本…「台湾各地域・都市の案内記」 全8巻●揃154,000円

ゆまに書房

〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-6
TEL.03(5296)0491 FAX.03(5296)0493

http://www.yumani.co.jp/
※税込・パンフレット進呈



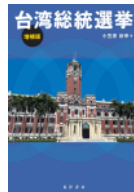
「現代村落」のエスノグラフィ
台湾における「つながり」と村落の再構成
前野 清太郎 著 日本・中国との異／同比較の壁を超えて、台湾農村から先進諸国に通じる新たな「現代村落」モデルの構築を試みる。
5610円



「歪情報」の政治学
「わいじょうほう」
アメリカの台湾政策を読み解く
村上政俊 著 新たな情報モデルである「歪情報仮説モデル」を提唱し、アメリカの台湾政策の変更可可能性について理論的に解析。
3080円



オランダ植民地統治と法的住民区分の変遷
国籍法と統治法による植民地住民の包摂と排除
吉田 信 著 「原住民」と「ヨーロッパ人」を分けるものとは？ 植民地住民の法的区分の変遷をたどり、国籍の背後にあるものに迫る。
5280円



台湾總統選挙 増補版
小笠原 欣著 台湾メディアで「選挙の神様」と称される学者による、總統選挙研究の決定版。台湾政治の三〇年がこの一冊でわかる！
3300円



「人の移動」の国際政治
東アジア冷戦体制の形成と日本華僑
鶴岡 裕基 著 近代的な主権国家システムが作り出す「国境」と日本華僑との関わりを、歴史的に描き出す。
5500円

晃 洋 書 房

〒615-0026 京都府京都市右京区西院北矢掛町7番地
TEL 075 (312) 0788 / FAX 075 (312) 7447

※表示価格は税込

中国モダニズム作家の歴史再構築

(表示価格は税込です)

施蛰存歴史小説論

青野繁治

A5判上製・一九一頁 一、七五〇円

一九二〇年代から三〇年代にかけて小説家として、また『現代』という雑誌の編集者として活動した施蛰存の歴史小説作品五編を取り上げ、その過程を明確化することによって、歴史と文学の問題つまり史実と虚構の問題を様々な角度から考察する。

物語 中国史

カイ・フオーゲルザンク著

宮崎登記 富谷至監修

A5判上製・六八〇頁 七、七〇〇円

二〇一二年にドイツで刊行され、大きな反響を呼んだ中国通史『物語 中国史』(Geschichte Chinas)の翻訳。中国社会における構造の変遷と秩序形成の関係が中国史を構成する要素であるという観点から、中国の歴史を全九章に分ち詳述する。

インドネシアの歴史

富尾武弘

東西交流史の中心的ステージとして

B5判並製・二八〇頁 五、四〇〇円

中国・インドという2大文明圏の中間に位置し東西交渉の要衝として重要な役割を果たし、またイスラム・西欧世界と東アジアの世界史的展開の舞台となったインドネシアの歴史を、その基本的な特質に注目して概述する本格的通史。

東アジア文明論

趙東著 豊福健二訳

A5判並製・三二〇頁 三、八五〇円

〒606-8311 京都市左京区吉田神楽岡町8番地
TEL (075) 761-1285 FAX (075) 761-8150
E-mail: hoyu@hoyubook.co.jp

株式会社 朋友書店

株式会社

天津市民の食生活 社会主義制度下の歴史人類学

劉征宇著 計画経済下の配給制度から「世界一の胃袋」へ、食卓に見る中国七〇年の変貌。詳細な事例調査や個人史から庶民の日常と変化を描く、貴重な社会史。 四四〇〇円

王崧興『亀山島』と漢人社会研究

川瀬由高・稲澤努・長沼さやか・藤川美代子・呉松旻編訳 原石のような民族誌の古典を完訳。陳其南の特別寄稿や論考・資料による多角的かつ今日的な再評価。 三七四〇円

移民社会のナショナルリズム 持田洋平著

「シンガポール近代華人社会史研究」植民都市の巨視・微視から清末アジアの拍動するネットワークを描く。それは「華人」という自意識の誕生した瞬間でもあった。 三三二〇円

勁草之志 二つの国に生きる 学者の人生と学問

轟莉莉著／奈倉・美麗編 文革など中国現代史の波に翻弄されながら、懸命に生き、学び、考え続けた思索の記録。師を語り、著作の行間を語る自伝的エッセイ。 一九八〇円

日本人類学の血脈 伝承の現場と論理

山下晋司著 学史を彩る巨人たち、学界の成り立ち、後継者の育成、最終講義や追悼、そして出版社・パトロン……。数多のエピソードで描く人類学の裏面史。 八八〇円

風響社

〒114-0014 東京都北区田端4-14-9
TEL: 03-3828-9249 FAX: 03-3828-9250

(価格は税込)

URL: <http://www.fukyo.co.jp>

花シリーズ三部作 完結！

現代台湾史を掘り起こす、陳耀昌の歴史小説

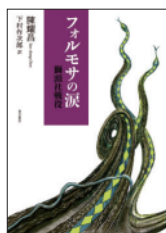


第一作

フォルモサに咲く花

下村作次郎訳／A5判 440頁／税込 2640円 978-4-497-21916-9

1867年、台湾南端の沖合で座礁したアメリカ船の乗組員が原住民族に殺害された「ローバー号」事件の顛末。原題『傀儡花』。



第二作

フォルモサの涙 獅頭社戦役

下村作次郎訳／A5判 352頁／税込 2640円 978-4-497-22314-2

1875年、「開山撫番」政策下で起こった最初の原住民と漢族の最初の戦争「獅頭社戦役」を描く。原題『獅頭花』。



第三作

フォルモサを照らす月 山脈を越えた帝国

石原嘉人訳／A5判 224頁／税込 2640円 978-4-497-22513-9

舞台を台湾東部に移し、1877年から1888年に起こった原住民族と漢族の3つの衝突事件を描く。原題『苦楝花』。



東方台湾語辞典 第2版

村上嘉英編著／四六判 572頁／税込 8800円 978-4-497-22411-8

台湾教育部による台湾語常用語辞典オンライン版、国立成功大学台湾語検定試験センター認証の難易度明示台湾語単語集（試用本）ほか近年出版された台湾語（閩南語）の辞典、教科書、学習書などを参照の上、2007年初版の語彙を増補・削減。



https://www.toho-shoten.co.jp/web_toho



東方書店のWEBマガジン WEB『東方』

中国関係の書評やコラム、連載のほか、輸入図書情報や催事情報も充実。

≫≫ 好評連載中「研究会にきく」≪≪

中国同時代小説翻訳会／SNET 台湾／日本杜甫学会／日本華僑華人学会／東アジア恊異学会／中国古典小説研究会／中国史史料研究会

東方書店 [中国・本の情報館] <https://www.toho-shoten.co.jp/>

店舗 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-3

☎ 03-3294-1001 shop@toho-shoten.co.jp

営業 〒175-0082 東京都板橋区高島平 1-10-2

☎ 03-3937-0300 tokyo@toho-shoten.co.jp

関西支社 〒564-0063 大阪府吹田市江坂町 2-6-1

☎ 06-6337-4760 kansai@toho-shoten.co.jp



＊中国文庫の本＊

● 最新刊！

中国現代文学と日本留学

大東和重著

(A5 判上製本 368 頁 本体 5,000 円＋税)

中国現代文学を作ったのは、日本留学を経験した、中国の作家たちだった。

● 好評既刊！

巴金とアナキズム——理想主義の光と影

山口守著

(A5 判上製本 490 頁 本体 9,000 円＋税)

近代中国を代表する作家の一人である巴金を、アナキズムと文学という視点から考える。

中国の庭、台湾の庭——拙政園、留園、林家花園

緒方賢一著

(四六判並製本 334 頁 本体 2,500 円＋税)

蘇州園林の拙政園と留園、台北の林家花園を逍遙し幽玄な中国庭園の真髄に迫る。

黒い雪玉 日本との戦争を描く中国語圏作品集

加藤三由紀編

(四六判並製本 402 頁 本体 3,800 円＋税)

中国と日本の戦争を描いた詩や小説、エッセイ 19 篇を収めた翻訳集。

野蛮な文明——近代上海の通俗メディアと社会小説

神谷まり子著

(A5 判上製本 290 頁 本体 4,500 円＋税)

清末民初期における社会小説を論じるとともに、近代中国文学の新たな側面を見出す

上海の京劇——メディアと改革

藤野真子著

(A5 判上製本 360 頁 本体 6,000 円＋税)

上海京劇発展の全体像を複数の角度から検証する。

男旦（おんながた）とモダンガール

——二〇世紀中国における京劇の現代化

田村容子著

(四六判並製本 406 頁 本体 3,000 円＋税)

二〇世紀の京劇がたどった現代化の道のりを、男旦と女優に焦点をあてて考える。

〒167-0022 東京都杉並区下井草 2 丁目 36 番 3 号 TEL/FAX 03-6913-6708

方言札の近現代史―沖縄言語教育の研究―

体裁ⅡA5判・上製・314頁 著者Ⅱ梶村光郎 定価Ⅱ7,150円

近現代沖縄における標準語教育の苛烈さを示す方言札は、いつからいつまで利用され、実態はどのようなものであったか？ 沖縄の綴方教育の実践の歴史と合わせて紐解き、戦前の皇民化教育から1970年代まで、沖縄における言語教育の歴史を通観！

沖縄・八重山五十年史

―沖縄返還交渉から「オール沖縄」まで―

体裁ⅡA5判・上製・520頁 著者Ⅱ三木健 定価Ⅱ6,820円
常に辺境から中央をみつめてきたジャーナリストの歩みが織りなす畢生の沖縄現代史！

引揚エリートと戦後沖縄の再編

体裁ⅡA5判・上製・388頁 編著Ⅱ野入直美 定価Ⅱ4,070円
戦後沖縄の再編を担った台湾・満洲からの引揚エリートたちの姿を追う！

戦前期沖縄一中学友会雑誌集成

―『球陽』『学友会雑誌』『養秀』―

全2回配本・全8巻・附録1 体裁ⅡA5判・上製・総約3,800頁
解説Ⅱ阪井芳貴 揃定価Ⅱ220,000円

戦前の沖縄において、いわゆるナンバースクールとして沖縄教育会をリードし、県内外で活躍するエリートを数多く輩出した「沖縄一中」（沖縄県立第一中学校）の学友会雑誌を復刻。

占領期奄美・沖縄の青年団資料集

全4巻・付録1・別冊1 体裁ⅡB5判／B4判／A5判・上製・総約1,1903頁 編・解説Ⅱ山城千秋・農中至 揃定価Ⅱ110,000円
奄美・沖縄群島の戦後史を語るのに欠かせない、両群島における青年団運動の実態を示す機関誌紙・書籍を収集復刻。

戦前期台湾ハンセン病療養施設・衆生院機関誌〔復刻版〕

万寿果 全4巻

体裁ⅡA4判・上製・総1,596頁 解説Ⅱ星名宏修
揃定価Ⅱ83,600円

植民地下における日本のハンセン病政策の在り方、そこで活発に繰り広げられた文芸活動の全貌を捉えるための貴重資料。

旧制台北高等学校同窓会誌〔復刻版〕

蕉葉会報 全3巻

体裁ⅡB5判・上製・総1,074頁 解説Ⅱ河原功
揃定価Ⅱ66,000円

戦後の1961年5月に創刊、2013年6月の最終号まで発行された。卒業生を通じた日台交流の様子を明らかにする。

十五年戦争極秘資料集 補巻56

尖閣群島測候所建設調査報告

体裁ⅡB5判・上製・総約140頁 編・解説Ⅱ三木健 定価Ⅱ16,500円
幻に終わった尖閣諸島への測候所建設の構想と挫折の過程を記した極秘資料を収録。

十五年戦争極秘資料集 補巻50

台湾議會設置關係書類

体裁ⅡB5判・上製・412頁 解説Ⅱ若林正丈 定価Ⅱ27,500円
「台湾議會設置請願運動」と治警事件」の実態が窺える貴重史料を復刻。

十五年戦争極秘資料集 補巻48

台湾総督府第六十回帝國議會説明資料

全5冊 体裁ⅡB5判・上製・総約2,070頁 解説Ⅱ河原功
揃定価Ⅱ104,500円

台湾総督府が帝國議會での報告のために作成した資料を復刻。

不二出版

〒112-0005 東京都文京区水道 2-10-10
TEL.03-5981-6704 FAX.03-5981-6705
URL <http://www.fujishuppan.co.jp>

各回分売可
内容見本・目録送付
価格税込

学会運営報告

- 2025年4月に学会事務局が東京大学東洋文化研究所に移転しました。
- 2025年3月17日に第13期理事会第6回常任理事会が開催されました。
- 第14期理事会が発足しました。
- 2025年5月23日に第14期理事会第1回会議が開催されました。
- 2025年5月24日に第14期第1回会員総会が開催されました。
- 第14期理事会において、理事選挙の電子投票導入に関する技術的検討（模擬選挙）を実施しました。
-
- ★ 常任理事会、理事会、会員総会の抄録は学会HP (<https://jats.gr.jp/rijikai/rijikai.html>) より閲覧が可能です。

入退会等（2025年7月26日の常任理事会承認分まで）

非公開

◎ 学会事務局より会員の皆さまへお願い◎
帰国等の事情で学会活動ができなくなった場合には、退会の届け出が必要です。退会される場合には、必ず「退会届」をご提出ください。提出が遅れると在籍扱いとなり、その間の会費を請求せざるをえませんので、どうぞご注意ください。また、学会活動を継続していただける場合は、住所変更の届け出をしてください。

編集後記

今号より紙面をリニューアルいたしました。今後も、会員間の交流にいつそう役にたつニュースレターとしていきたいと思いますので、レイアウトや内容などご意見をいただければ幸いです。なお次号では、2024年度に博士学位を取得した会員にご自身の研究紹介をしていただくことを企画しています。2024年度に博士学位論文を提出された会員の方は編集委員までお知らせください。（松田ヒロ子）

今号より、松田ヒロ子さんと二人体制で編集担当を務めさせて頂くこととなりました。関わる人の多さに驚くとともに、これまで一人で務めてこられた歴代担当幹事の方々に頭が下がる思いです。ニュースレターがより身近なものになるよう努めたいと思っていますので、会員の皆様の御協力をお願い致します。（吉田真悟）

日本台湾学会ニュースレター 第49号

発行：日本台湾学会（会長：川上桃子）
発行年月：2025年10月

日本台湾学会事務局
jats.jimukyoku[at]gmail.com
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学東洋文化研究所 松田康博研究室気付

ニュースレター発行事務局
hirokomatsuda[at]gmail.com
〒650-8586 兵庫県神戸市中央区港島1-1-3
神戸学院大学現代社会学部 松田ヒロ子研究室気付